



## 演劇文化の発展につくした人

菊田一夫

菊田一夫は、他の劇作家が誰も及ばないほど、たくさんの脚本を書いた劇作家である。中でも、太平洋戦争による東京大空襲で家や両親を失った戦災孤児を救うために書かれたラジオ放送劇「鐘の鳴る丘」は有名である。この作品は映画や小説にもなっており、多くの人々に親しまれた。

菊田一夫は一九〇八年（明治四一年）に神奈川県横浜市に生まれた。その年の十月には事情により両親と生別し、よその家で暮らすことになった。六歳の時に親切な養父母にめぐり合い、菊田家の一員となった。しかし、その後も苦勞を重ね、十二歳から十六歳まで大阪や神戸で働き、仕事の合間に読書にいきしんだ。

十七歳の時に、詩人になる決心をして東京に行ったが、まず、生活のために職をさがした。小学校卒業の学歴さえ無かったために大変な苦勞をし、やっと印刷会社の見習いのような仕事についた。このような貧しい暮らしにたえながら、詩の勉強を続けた。尊敬する詩

人は、萩原朔太郎であった。このころに小説家をめざす林芙美子や詩人のサトウハチローと知り合いになった。

そのうちに、勤め先の印刷会社が倒産し菊田一夫は職を失った。やむなくサトウハチローを訪ね、内弟子にしてくれるようお願いした。サトウハチローはこころよく引き受けたものの自分自身の生活も楽ではなかった。そこで浅草の芝居小屋を菊田一夫に紹介した。一九二八年（昭和三年）のことであった。こうして菊田一夫は二十歳の時から芝居作りの道に進んだ。

一九四三年（昭和一八年）には、情報局（NHKの前身）からの依頼にこたえて「花咲く港」を書きあげた。この作品は、戦時体制の重苦しい次代に明るい希望をもたらすような内容であり、大好評をえた。この作品によって、菊田一夫は芝居作りの実力を認められ、劇作家としての地位を確立した。この年、結婚して家庭を築いている。三十五歳の時であった。

一九四四年（昭和一九年）アメリカ空軍による東京大空襲が始まった。翌年の三月十日の未明には、戦時下では最も多くの犠牲者があつたと言われる東京大空襲があった。劇作家になるまでの自分を育んでくれた浅草の地も焼け野原となってしまった。

それから九日後、菊田一夫は、知人の紹介で家族を旧江刺郡岩谷

堂町（現江刺区岩谷堂）の及政旅館に疎開させた。菊田一夫自身は、一九四五年（昭和二〇年）八月十五日（終戦の日）から及政旅館に滞在しているが、戦争によるあまりにも悲惨な光景を目撃し、敗戦の痛手を一身に負って虚脱状態におちいつていた。

江刺の地は、東京の状況が信じられないほど豊かな自然に恵まれたのどかであった。仕事に追われ家族を振り返ることがなかった菊田一夫は、やっと家庭の温かさをしみじみと味わうことができた。宿から、緑の丘の上にとんがり帽子の赤い屋根をした和洋折衷の建物（現明治記念館）がながめられた。菊田一夫は次第に気力を取りもどしていった。

菊田一夫は新しい演劇文化を創造する決意を固め、九月十八日、独り上京した。東京では、新しい演劇活動に取り組むとともに、NHK文芸部の依頼を受けて連続ラジオ放送劇「山から来た男」を発表した。この放送劇は、戦争で傷ついた多くの人々に希望をもたらした。テレビがなかったこの時期、ラジオ放送は社会の様子を知る上で貴重な手段であった。

菊田一夫はラジオドラマの脚本を書き、演出も担当した。（どんなことがあってもまっすぐに生きていってほしい）という願いを込めて、戦災孤児を励ますための脚本を書いた。焼け野原となった東

京の下町で生きている孤児たちが、復興を願う青年たちと協力して作物を育てたり、自分たちの家を建てたりして自立の精神を高めていくという物語である。ドラマ展開の地は、東京下町、長野県の穂高、岩手県の江刺である。これが連続ラジオ放送劇「鐘の鳴る丘」である。この放送劇は一九四七年（昭和二二年）から十五分番組で放送され、七百九十回という驚異的な放送回数を記録した。我が国の戦後復興の精神的支柱となったと言われるほど好評であった。この劇の主題歌が菊田一夫作詞、古関裕而作曲の「とんがり帽子」である。この主題歌も広く歌われるようになり、愛唱歌となっていた。選抜高校野球では入場行進曲にもなっている。

続いて一九五二年（昭和二七年）には、戦後復興の時期における青年たちの生き方を問いかける連続放送劇「君の名は」を発表。この作品も大好評であった。後に小説として発刊されるとともに映画化され、テレビの普及にともなって連続放送劇としてテレビ番組にも登場した。

菊田一夫は、ラジオ放送文化における放送劇の第一人者であったが、さらに、演劇やミュージカルの演出や脚色にも取り組んだ。

昭和三十年代以降、菊田一夫は、（現代のあるがままの生活を舞台に再現したい）という主張のもとに現代劇の創造に没頭した。

また、我が国の近代・現代文学作品や社会の現実を素材とした脚本を書き、次々と上演に成功した。一九六一年（昭和三六年）初演の「放浪記」は、二〇〇九年（平成二一年）五月に二千回という驚異的な公演を記録した作品としても有名である。

劇作家菊田一夫は、これらの他に、寝る間を惜しんで多くの小説や随筆を書き、幼い時から実社会の荒波にもまれながらも、良心を失わずに生きることができたということを、多くの人々に訴え続けた。戦争による疎開が縁で結ばれた江刺ゆかりのこの高名な劇作家は、一九七三年（昭和四八年）四月四日午前九時入院先の慶応病院で静かに息を引き取った。享年六十五歳であった。



鐘の鳴る丘（明治記念館）

※菊田一夫についてもっと詳しく知りたい方は、菊田一夫記念館を訪ねてみてください。 （問い合わせ 三五―九八〇〇）

#### ※参考文献

「芝居作り四十年」

菊田一夫著 オリオン出版社

自伝小説「がしんたれ」

菊田一夫著 角川文庫

「評伝 菊田一夫」

小幡欣司著 岩波書店

「ママによろしくな」父・菊田一夫のまなざし

かまくら春秋社



菊田一夫記念館